

概要

2011年【古典を読む-歴史と文学-】 「いま明かされる古代X X VIII」

第4回 屋代遺跡群出土の 7世紀木簡 - 歴史研究におけるその意義 -

開講日時： 7 / 16 (土) 午後2:30～4:30

講義会場：金鷄会館(国登録有形文化財)宝形塔屋講義室

講師：学習院大学 文学部 史学科 教授

鐘江 宏之(かねがえ ひろゆき)先生

概要：

長野県千曲市の屋代遺跡群では、古代の信濃国を考える上で貴重な木簡が131点出土しており、それらの中には、7世紀後半の年紀を持つ木簡が含まれている。

7世紀は、国家の仕組みが整えられて律令制社会が準備された時代であり、その状況がどうであったのかという点は、日本という国家が形作られる上で重要な時代である。この7世紀の時代を語る史料として残された文献は多くはなく、またさまざまな問題を抱えている。そのような文献の状況に対して、当時の人々が記した文字が残された木簡は、直接に多くのことを明らかにする貴重な情報をもたらしてくれる。ことに、地方社会がどのような状況にあったのかを、その地方に即した面から明らかにしてくれるという点で、地方出土の木簡の意義は大きい。

今回は、屋代遺跡群の木簡の中から、注目されるいくつかのものを取り上げて、そこからわかることを具体的にお話したい。